

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.217

ISSN 2432-5295

とどける

C O N T E N T

◆【とどける】…01～04

- ・二十八災
- ・相手を思って「届ける」
- ・走る楽しみを「とどける」
- ・国内で18人に1人が体外受精で誕生
- ・鮮魚を届ける
- ・ミャンマーに届けよう！
- ・登山客が利用する山小屋の物資を届けている「歩荷」を知っていますか？

◆今、こんな仕事しています…05～07

◆新人紹介…07

◆arpak spirits…08

- ・京都駅ビル

◆近況&イベントのお知らせ…09～10

◆まちかど…裏表紙

- ・ホーチミン市のまちのなかで出会った本と憩いの空間

レターズアルパックは、アルパックと所員の声と今を、みなさんにお届けするメディアです。

「届ける」は、「届けたいもの」と「届けたい人」があって成立する概念ですが、「届けたい人」に「届けたいもの」を受け取っていただきたとき、初めて完結する双方向の行為です。

一方、情報発信という言葉がありますが、こちらはどちらかというと情報を受信する側への意識が薄い、発信側の論理で成立する行為という印象です。

レターズアルパックの前身はアルパックニュースレター。No.201を契機にこの辺りの議論を経て、名称の変更と紙面の刷新を行いました。

レターズアルパックは単なる情報発信ツールではなく、あなたの顔を思い浮かべながら、所員がお届けする「レター」でありたいと考えています。

レターズアルパック編集委員会

とどける

二十八災

三輪泰司：名誉会長

昭和28年（1953年）は大変な年でした。大学4回生で、今でいう災害救援ボランティアを体験し、二次災害にも遭いました。

河川関係者は、6月…西日本大水害（九州地方、死者1001、被災者100万）、7月…紀州大水害（近畿南部、死者1015、家屋全壊3209、流出7986）、8月…南山城大水害（死者336）をまとめて、「二十八災」と称しています。

夏休み中でしたが京都大学当局が被災した学生を救援するという名目で、慰問品を届けるため交通費を用意し、学生自治会である同学会が、帰郷していない学生、京都出身の学生に呼びかけ、救援隊が編成されました。文学部のA君、農学部B君と私の3名の班は、紀州・和歌山県の日



8月16日、巨棕池が再現（観月橋付近）

高川流域を担当することになりました。

8月18日午後、学生部の角南厚生課長らに見送られて出発しました。和歌山大学の学生寮が救援センターになっていて申告して一泊。翌朝、寸断されている鉄道とバスを乗り継いで御坊に着き、工学部のN君宅を見つけました。家は鉄筋コンクリート。ドローが入っていますが無事です。「もつと上流へ行つてあげて」と、慰問品は受け取られないのです。次は上山路村のW君宅を目指し、着いたのは夕刻近く。大山林地主のお屋敷です。高台にあつて、水害には関係なしです。「遠い所まで、ようきてくださつて」と歓待されました。「上流の川上村がひどいらしい、そちらへもつて行つて」と逆に慰問品が増えてしまいました。

日高川を見下ろす山道を歩いてみると、山側がザーツ、ザーツと揺れるのです。サルなつてついでくるのです。川上村の中心部、河原郷へ着いたのは、衝撃的なシルシで分かりました。道の上に家の藁屋根が被さっているのです。A村会議員宅が、センターになつていました。被災直後のままです。電気も復旧していません。村はずれにある小学

校の体育館が、避難所になっていました。

山ひとつ越えた数十人の集落は、いわゆる基層地滑りで30メートルもの土に埋まってしまったそうです。夜中、悲痛な叫び声が聞こえたそうです。とにかく、何とか家へ帰れるよう、入り込んだ土石を取り除くことです。ハードです。紀州名物の「茶粥」を振舞つてくださるのですが、30分もすると、もとの空腹に。そうこうしていると、川の水がひいて、せせらぎのようになり、子どもたちが河原で遊ぶのです。と、古老が「アブナイ、川から離れろ」と叫ぶのです。上流で自然のダムができています。決壊するということです。

はたせるかな、轟音とともに、木材が踊って押し寄せてきました。アツという間に橋が流されてしまいました。さあ、たいへん。孤立してしまいました。

川上村は、実は、筏流しの村なのです。上流の龍神村がキコリの村。切り出したヒノキを筏に組んで河口の御坊まで運ぶのです。鴨緑江まで筏流しに行つていたそうです。彼らが橋の架け方を教えてくれました。

岸から2〜3メートルの所に二股を立て、足元へ石を投げこんで固める。上流から長い材

を流し、引っかけて、引っ張り上げ、二股にコトンと掛ける。岸から短い丸太を架ける。これで丸木橋ができます。二つ架けると橋らしくなります。

筏師にもう一つ教わったのは、狼煙です。見通せる山々に、狼煙台があるのです。村から河口まで、意外に早く伝わるのです。そして、狼煙のボキッブラーが、豊富なことも驚きでした。

下流へ「橋が復旧した」と送ると「了解。今夕刻、御坊から、救援隊が、出発する。明朝着く」と知らせてきました。

払暁、点々と連なってくる松明は、心強かったです。それから、救援隊が続々きました。

筏師の「流筏労働組合」がありました。夜、組合の総会に招かれました。手に手にローソクを灯して、幻想的でした。せいぜい、3〜4日と思つていたのが、結局、3週間、京都へ帰り着いたのは、9月6日の夕刻でした。

近年、雨量、風速は違わないようですが、人的被害は少ないです。河川管理と警報体制が進んだ結果かと思えます。それに比べて、住民の訓練が失われていないでしょうか。以前は自治会で「水防団」を編成し、ボートを持っていた。

相手を思って「届ける」

松下藍子：都市・地域プランニンググループ

両親の実家が和歌山県有田郡にあります。和歌山県の有田川流域一帯で生産される有田みかんは、和歌山の代表的なブランドの一つですが、父方の祖父もこの有田みかんを栽培する農家を営んでいます。

そして、私が物心ついた頃には、既に毎年欠かすことなく、季節の折々に作った果物をたくさん届けてくれていました。私が遠方に住んでいた時も、どうしてもないと寂しくなり、わざわざ送り届けてもらっていました。とてもおいしい祖父の作った果物は、私の自慢です。そんな祖父もすっかり年をとり、農業を退き、今では叔父夫婦が農家を継いでいます。

私はというと、いつの頃からか毎年お盆やお正月の帰省の時期には、祖父の元に、祖父の大好きな日本酒を届け、飲み交わすことが定番となっています。祖父はこの時を楽しみにしてくれていて、私もいつでも元気で、おいしそうに飲む姿を見るのが楽しみの一つと

なっています。

今回のテーマである「届ける」という言葉には、「渡す」や「送る」という言葉よりも、より受け取る側が重要だという意味があるように思います。最近ほ

れかに贈り物を届けるということとはあまりありませんが、祖父とのこの毎年のやりとりは、その物以上の大切さがあると感じています。



走る楽しみを「とどける」

杉本健太郎：建築プランニング・デザイングループ

皆さんは日頃、何が運動をされていますか？

私は普段、集中して業務に取り組むあまり、デスクから何時間も動かないことが多く、運動不足になりがちです。そこで最近、和田と所内でメンバーを募り、フルマラソンを目標に定め、終業後に夜の大阪を走っています。

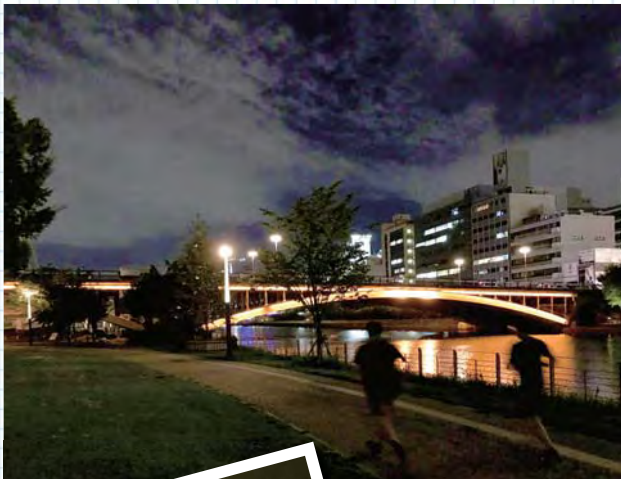
ジョギングコースは、事務所近くの大阪市中央公会堂前からスタートし、ライトアップされた土佐堀川・大川沿いを走り、大阪城外堀を周回した後、再び公会堂前に戻ってくる約10キロメートルのコースです。

さすが「水都大阪」、橋や堤防沿いのライトアップに加え、飲食店のテラス席から漏れる明かりな

ど、普段は目にしない、色とりどりのナイトスケープが広がっています。人々の活動も多様で、川沿いのジョギングやウォーキング、橋の下の照明に照らされた広場でのダンスサークル、そして川の上には、宴会やパーティーをする船が浮かんでいます。

室内にこもってパソコンと睨めつばかりではなく、実際に外へ出て、空間を普段使いすることの大切さを再認識しています。賑やかで生き生きとした、とても楽しい光景の中をストイックに走り抜けることは本当に気持ちがいいものです。都市の中に川が流れ、風が通り、広場や芝生があり、歴史を感じる建物があり、テラスのある飲食店があり、豊かなオープンスペースで様々な人々の活動が行われています。

これから涼しくなり、走りやすい季節になっていきます。皆さんも秋の夜長に「水都大阪」を走ってみてはいかがでしょうか？



ライトアップされた大阪城

天神橋付近の川沿いを走る

国内で18人に1人が体外受精で誕生

～平成28年日本産科婦人科学会の発表データより～

岡崎まり：地域再生デザイングループ

平成28年に日本産科婦人科学会が発表したデータによると、体外受精によって国内で生まれた子どもの数は18人に1人程度にのぼるそうです。

小学校等で1クラスあたり2人程度は体外受精により生まれた子どもが存在するということがわかります。30代既婚女性である私からすると、不妊治療は友人何人かで集まって話せば話題の一つにものぼるし、雑誌等でも見かける内容であることから身近な存在であり、「18人に1人」と聞いても驚く数値ではありません。実感として3年後の今では更に増えているのではないかとさえ感じています。

体外受精に至るまでには、タミニング法、人工授精等の治療を行い、それでも授からなかった場合に体外受精、顕微授精といったステップを踏むことになります。そのため、不妊治療により生まれている子どもの数は18人に1人より遙かに多いといえます。

同じ子どもを授かるための治療ですが、記事などで文字が並んでいるのを目にすると「授」と「授」の違いが妙に気になりました。子どもを望む夫婦に子どもを届ける治療ですが「授ける」「側」と「与え授ける」「側の存在を感じたからでしょうか。

調べてみると、精子と卵子が出会い結合する治療には「受精」、医師の手を借りて精子を子宮、又は卵子の中に入れて妊娠を成立させる治療には手偏の「授精」という漢字が使用されているそうです。

晩婚化に伴い高齢出産をする女性が増加してきていますが、それらは不妊治療の進歩によって支えられているところもあります。ただ、妊娠や出産に比べて治療に終わりが見えなかったり、周りに相談しづらい内容であることから20～30代の当事者意識のない人には届きづらい内容とも言えます。

NPO法人Eneが平成29年に実施した「仕事と不妊治療の両立に関するアンケート」によると不妊治療のために5人に1人は職場を退職している事実がわかっています。また、職場に不妊治療をサポートする制度が「ある」と回答した割合も6パーセントに留まっています。相談しづらい内容であることから会社も実態を把握しづらいかと思えます。今回この記事を皆さんに届けることで、30・40代の女性にとって仕事と子育ての両立の悩みが、子どもを生む前から既に始まっている人も多く存在することを知ってもらえたらと思います。

鮮魚を届ける

廣部出：公共マネジメントグループ

若狭の高浜町で総合計画策定のお手伝いをしています。

海辺のまちの話題で『とどける』というならもちろん鮮魚。サゴシやスズキ、ツバスなど青物から、カサゴ、キジハタ、オコゼなどの根魚、アジやアオリイカなど、水揚げされたばかりのいろんな季節の魚がスーパーに並んでいます。それが安い。多種多様なおいしい魚がこんなに安価に、普段から手に入るというのは、うらやましい限りです。大変うらやましいので、ぐつと堪えて買って帰らないでいます。何が言いたいかわかりませんね……。

実は最近、25年振り？くらいに釣りを始めたんです。驚きました。道具や釣り方の細分化・高度化がすごい。釣りキチ三平世代ですから、毎日のように



にいろんな釣りをして遊んで育ちましたけれど、当時の知識や経験からキャッチアップするのはなかなか大変です。釣り糸の結び方から練習したり、見たことのない不思議な道具について「へえ」となったり、酒代をケチりながら道具を少しずつ買い込んだり。そうです、鮮魚をわざわざ釣って帰りたいんです。

「釣り人候」の出で立ちで打ち合せに行ったりできないですし、そのへんはゴニョゴニョと言葉を濁しておきますが、このところ仕事の打ち合せが終わった後に釣りに出かけたりして、小さいながら狙いのキジハタを釣り上げることができました。ウチの食卓に、めでたく鮮魚が届いたわけです。刺身・アラの味噌汁で食べてめちゃくちゃ良かったです。

さてしかし、ご存知ですか？例えば、錘と針が一緒になった、ちよつとした釣り道具が1個500円以上するんです。これ、根掛かりとかしたらすぐに無くなっちゃうんですよね。節約はしていますが、釣り道具のイチイチが高い。1匹のちよつと！雨で釣りに行けない時は、潔く買って帰ることにします……。

ミャンマーに届けよう！

高野隆嗣：地域産業イノベーショングループ

先日、ミャンマーの建設分野のCEOを対象にした研修をお手伝いする機会を得ました。

ミャンマーの人口は約5千万人。日本の2倍の国土に、ビルマ族を中心に百を超える民族が暮らします。民政化が進む中、日本からも生活上や人材育成、インフラ整備に係る支援が行われています。

JICAでは、途上国の経営層を日本に招請する研修事業を行っています。今回のCEO研修が「建設」に絞られたのも、同国のインフラ熱が背景にありそうです。

8月下旬から12日間、大手ゼネコン、高速道路公社、リフォーム会社、自動車工場など十数力所の現場見学のほか、ビジネス交流会まで目白押し。従業員数千人のデベロッパーから数名の工務店まで、さまざまな企業規模の経営者19名が日本企業の経営や技術を学びます。若い女性経営者が多いのもお国柄。「流石はミャンマー」と妙に納得。

私の役割はコースリーダー。数回に分けて、研修の課題設定や成果まとめなどをご指南するもの。曰く、彼の国の建設業界における課題は、金融（短期・

高金利）、技術（国研や大学の不足）、人材（専門技術者や技能者育成）、インフラ（安定電力や交通基盤）、法令・制度（あらゆる面で未整備かつ遵守されていない）、更には国の政策など多岐に渡ります。

今回の研修で、見るもの・聞くことが、学びと発見、驚きとため息の連続だと云います。とは言え、意気消沈してる訳ではありません。老いも若きも眼をきらきらと輝かし、愉しそうに国の未来を語っていました。

彼らが一番印象に残ったのは「日本の経営者のマインドセット」とのこと。彼らがしっかりと持ち帰り、彼の国で仲間や社員に届けてくれたならとても嬉しいです。



弊社と縁の深いけいはんな学研もご案内しました
(写真は国立国会図書館関西館)

登山客が利用する山小屋の物資を届けている「歩荷」を知っていますか？

駒和磨：サステナビリティマネジメントグループ

普段の仕事でも、フィールドに出かけることは多いのですが、私は基本的に休日は、登山・素潜り・釣り等々、アウトドアに出かけています。

その中でも、体一つで難所に挑戦できる登山が一番好きで、職場が東京になってからは、暇があれば日本アルプスの登山計画を友達と立てています。

日本アルプスしかり、山には道中・頂上付近には山小屋あり、食事・宿泊が出来ますが、水や食料はどのように届けられているかご存知でしょうか？一部の山ではロープウェイ、高山の山頂ではヘリコプターで運ばれています。低山、高山でも標高の低い位置にある山小屋等や軽い荷物は「歩荷（ぽっか）さん」と呼ばれる方が、荷物を担いで、

人力で届けられています。

私が、テント泊で登山する際、1泊だとザックの重さは10キロ程度ですが、歩荷さんが届ける荷物の重さは、軽くて30キロ、平均して70～80キロになり、中には100キロを超える荷物を届ける強者もいるそうです（私自身、普段から身体を動かしているつもりですが、10キロの荷物を背負って登るだけでも息を切らしながら登っています）。ちなみに、歩荷さんは、山小屋の食料・水以外にも、トイレ汚泥処理用のタンクやプロパン等燃料など、山で必要になる物資が届けられています。

私たちが山に登る時、快適で、かつ、安心して山小屋を利用出来るのは、歩荷さんという裏方の活躍により実現しています。



吉香茶室の修理



吉香茶室全景



錦帯橋



茶庭夜景

高坂憲治：

建築プランニング・デザイングループ

吉香茶室という茶室をご存知でしょうか。錦帯橋（国指定名勝）といえども、錦帯橋は、岩国市錦川に架かる5連の美しいアーチ橋です。

慶長5年（1600）関ヶ原の戦いに際して、毛利輝元に仕えていた吉川広家は、西軍豊臣方でありながら東軍徳川方の勝利を予測し戦では中立を守り、毛利家の存続に奔走します。その結果、家康は毛利家断絶を改め、輝元に周防国・長門国を与えました。広家は、輝元より岩国（3万石）を与えられ、慶長6年岩国に入封、城下町造営に着手します。

広家は、横山山頂に城を築き、錦川を天然の外堀として、右岸横山に諸役所や上級武士の居住区を、左岸錦見に中下級武士や町民の居住区を築きました。

そのため、錦見に住む下級武士は、横山に行くために200メートルの川幅のある錦川を渡らなければなりません。当時錦川は度々

氾濫し、橋は橋脚ごと流出したことから、三代目当主（藩主）である吉川広嘉は早くから流れない橋の研究を進めていました。ある時、明の帰化僧・独立から西湖の5つの島に架かるアーチ橋の話聞き、これをヒントに5連橋の錦帯橋を思いつきました。以後何回かの架け替えを経て現在の錦帯橋があります。

話が少々長くなりましたが、こうして吉川家は岩国の領主として明治維新を迎えます。第十二代当主（藩主）である吉川経幹は廃藩置県により東京に居を構えましたが、経幹の長男経健は、明治25年（1892）東京から岩国に住居を移します。その際、邸内の祖霊社と共に移築されたのが現在の吉香茶室です。

吉香茶室のある横山には、かつて岩国高校があり、その跡地を中心に現在は吉香公園として市民や観光客の憩いの場となっています。吉香公園の北東ゾーンは、吉川家の居館があった御土居と堀に囲まれて吉香村

社（国重要文化財）や錦雲閣（絵馬堂）（国登録有形文化財）、旧吉川家廬門（国登録有形文化財）、能舞台などが横山山頂に再建された岩国城と一体となった美しい歴史的景観をみせています。吉香茶室は、その中でシイの太木に囲まれるようにひっそりと佇んでいます。



旧吉川家岩国事務所



岩国徴古館

今回、私たちは吉香茶室の修理に際して、茶室の公開計画を併せて策定しました。年間60万人を超える観光客が訪れる錦帯橋ですが、残念なこと北東ゾーンまで足を運ぶ人はそう多くありません。岩国の観光の課題を踏まえ、吉香茶室を吉香公園の中に積極的に位置づけ、回遊動線を明確にして人々の回遊性を高めることが目的です。

隣接して、日本の近代建築運動を主導しつつ、数寄屋造りの美とモダニズム建築の統合を図った建築家堀口捨巳設計の旧吉川家岩国事務所（国登録有形文化財）や、旧制岩国高校を卒業した建築家、佐藤武夫設計の岩国市の博物館である岩国徴古館（国登録有形文化財）が建ち、岩国の戦国時代から中世、近世、近代、現代が息づくところとなっています。

吉香茶室は、昭和26年岩国市に寄附され、昭和49年に隣接して新茶室が建築されました。

今回、吉香茶室の修理の設計にあたり、現存する形を変えないために屋根裏と床下に耐震リングを設置して耐震性を確保しました。屋根は瓦と銅板を全面的に葺き替えましたが、古い瓦は今回新しく作庭した茶庭に使用しました。茶庭はかなり荒れた状態でしたので、今回の修理で新しく作庭することとなり、蹲や飛び石などはそのまま用い、外露地や内露地を明快にできるよう露地門や中門、外待合などを配置し、全体の動線を含め作庭しました。

吉川家は、毛利元就の次男元春を祖とし、広島県旧豊平町に居館を構えました。アルパークは、2006年史跡吉川元春居館跡ガイダンス施設的设计をさせていただきました。この縁が今に届いています。

総合計画ワークショップ『タカラボ』を開催

丸井和彦：

公共マネジメントグループ



市長へ提言書を手渡す手交式も開催しました



ワークショップの風景

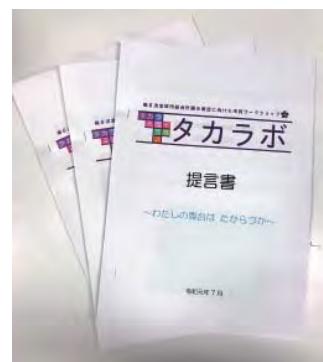
は「わたしの舞台」という、まちづくりの視点と6つの「めざすまちの姿」がまとめられています。今後は、この提言書を活かしながら第6次宝塚市総合計画の策定を進めていきます。

令和3年度からスタートする新しい第6次宝塚市総合計画の策定にあたり、めざすまちの姿などについて市民の意見を取りまとめ、市へ提言を行うため「タカラミライラボ（略称・タカラボ）」を平成31年2月より開催し、このたび提言書が取りまとめられました。

総合計画の策定過程でワークショップの手法を取り入れることは、宝塚市では初めての取り組みでした。公募により集まった10代～80代の市民42名と若手市職員10名が9回＋作業班5回のワークショップでそれぞれの想いを出し合い、のべ参加者人数は356名にのびりました。

「タカラボ」の特徴として、専門のファシリテーターや座長を置かず、参加者の主体性を重視したことが挙げられます。参加者が全員でゼロから提言書を作り上げる方法は難しい場面もありましたが、参加者が主体的に取りまとめたプロセスは大変意義深いものでした。

提言書では、「市民が主体となり、あらゆる世代がまちづくりに関わることが必要であり、『やりたい』ことができる環境を創り出し、まちを若返らせ、多くの市民が『つながり』を持てるようになればまちを発展させることができる」という考えのもとで、「わたしの舞台」



完成した提言書

丹波市まちづくりビジョンの策定 (中山間地方都市における持続可能な都市づくりへの挑戦)

岡本壮平：

都市・地域プランニンググループ

丹波市は兵庫県の中央あたりに位置する人口約6.5万人の都市です。豊かな自然と農産物、景観に恵まれ、京阪神から約1時間という近さもあり、都市と田舎の両方を兼ね備えています。

2004年旧氷上郡6町が合併し丹波市が誕生して以来、地域個性の尊重と全市一体の都市づくりの両立に取り組んできましたが、全国的な傾向と同じく、将来的な人口減少・高齢化が厳しく、暮らしや生業の持続性が危惧されるようになっていきます。

今回のまちづくりビジョンは、団塊の世代の全てが85歳に到達することとなる概ね20年後を展望して、めざすべき「まちの姿」と「暮らしの姿」をセッ

トで描くものです。

「まちの姿」は都市機能や施設に関するもので、都市の階層性を定義した上で、階層ごとの都市機能配置のあり方を示しています。特に、必要な機能を体系的に示し、今後の集約・再編・誘導等の取組により、生活支援機能の持続性確保を主眼としています。立

地適正化計画に近いものと言えます。一方の「暮らしの姿」は市民の日常生活や生業に関するもので、医療・福祉・住民自治・観光交流・公共交通などの観点から望ましい暮らし方やコミュニティのあり方を示しています。

ポイントは、「まちの姿」

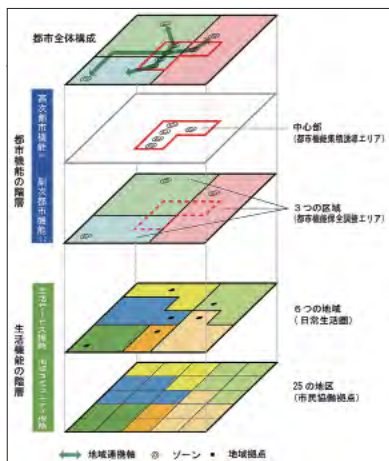


図 都市の階層性のイメージ

と「暮らしの姿」を相互に関連づけて描いている点です。主たる計画要素は都市計画ですが、市民生活を視点に多くの分野との連携を計画することによって、市民目線からは、自分や家族の暮らしのシーンを具体的に想起できる「等身大のビジョン」となっています。

人口減少・高齢化への対処として、全国的には立地適正化計画が制度化され、「コンパクトネットワーク」な都市づくりが増えています。もちろんいずれの都市にも有効性はありますが、機能分化（タテ割り）が進んだ都市部と違って、中山間地域の地方都市では分野間・機能間の関連性が強く、より総合的な計画スタンスが必要だと考えます。丹波市まちづくりビジョンの策定は、中山間地域の地方都市における持続可能な都市づくりプランの貴重な一里塚であると考えます。丹波市の大いなる挑戦に期待を込めて注目していきたいと思います。

『ひょうご SDGs 未来事業塾 高校生・ユース短期集中コース』を開催しました。

盛川正和：

サスティナビリティマネジメントグループ

前号で紹介した「ひょうご SDGs 未来事業塾」を開催し、高校生を中心とした参加者が一人ひとり、自分たちの未来について意見を出し合いました。

ひょうご持続可能地域づくり機構（HGO）、代表理事・事務局（当社社員）は、5期目となる今年度、「SDGs」をテーマに活動しています。

HGOによるコースのひとつとして、参加者一人ひとりがこれからの生き方について考えて意見交換することを目的に、8月に2日間のユース向けプログラムを開催しました。兵庫県の但馬地区および丹波地区の2地区で開催した同塾には、地元の高校生の方を中心に多数の方にご参加いただきました。

1日目は、澁澤事務所代表で農学博士の澁澤寿一氏より、「いま、君たちの生きる時代とは…」と題してご講義いただきました。SDGsを踏まえた「誰も取り残さない」という話や、これからの日本と世界の環境の話、幸せとはなにかなど、幅広く深いお話をしていただき、続いての質疑応答では参加者と澁澤氏との間で積極的な意見交換を行いました。その後、数人ごとのグループを作り、地元の強みと弱みはなにかについて整理・発表を行いました。

2日目は地元ゆかりのある

社会人の方々をお招きし、シチズンシップ共育企画代表の川中大輔氏にファシリテーターを務めていただきました。まずはそれぞれの先輩方に「普段どういう仕事をしているか」、「地元に戻った理由は」といったことについてボードに書いてお話しいただきました。続いて、先輩ゲストと参加者の小グループでの対話を通じて、各参加者が「自分はなにを仕事にしたいか」、「どこでどのように生きたいか」といったことを話し合いました。

今回のプログラムを通じて、参加者が一人ひとり、自分のこれからについてじっくりと考える機会になりました。

HGOでは引き続き、持続可能な地域づくりに資する活動を続けてまいります。詳しくはHPをご覧ください。
<http://hso-t.com/>

※本業務は、畑中、中川、戸田も担当しています。



8月19日 豊岡稲古堂
2日間のプログラム終了後の記念撮影

新人紹介

一期一会



近江篤
総務部

7月1日より、総務部に配属となりました近江篤と申します。この度、ご縁がありましてアルバックの一員となりました。

生まれも育ちも大阪で、前職では管理部門業務（人事総務業務／経理業務／システム業務等）を幅広く、約16年携わってききました。

私がアルバックに入所するきっかけは、アルバックスタッフの「人柄」です。採用面接を重ねるにつれ、アルバックの社風や人柄の良さに惹かれはじめ、自分自身が更に進化するための職場として、またキャリアを

通じて得た経験や知識をアルバックに少しでも届けられたらなという気持ちが強くなり、入所を決意しました。

今までのキャリアを通じて、私が大切にしていることがあります。それは、「有難う」の気持ちを常に忘れてはならない」ということです。人は生きていけば誰もがあらゆる困難に遭遇するかと思います。困難は「ピンチ」でもありますが、私はそれ以上に絶好の「チャンス」として認識するようにしております。

何故なら、困難を乗り越えた先には自分自身を更に進化させる明るい未来が待っていると信じているからです。『困難が有る（難が有る）』から「有難う」と主観的に解釈しておりますが、自分自身の進化を止めない為という意味で「有難う」の気持ちを常に忘れてはならない」と考えております。

アルバックのオールドルーキーとして常に初心を忘れず、これからの持続可能な地域づくりの貢献とアルバックの更なる発展の為に、様々な仕事に取組み挑戦していきたいと考えておりますので、何卒宜しくお願い致します。



※アルパック歴の浅い職員が、アルパックのエポックとなったプロジェクトの現場を創業者の三輪泰司と共に訪れてアルパック・スピリッツに触れ、その一端を三輪自身の言葉とともにみなさんにご紹介します。

伊藤栄俊・竹内和巳

「日本では、国際コンペの経験が少なかった中で京都駅ビルの国際設計コンペがスタートした」

今年、京都駅ビルが1997年にグランドオープンして満22年を迎えます。構想提案から事業主体設立、基本計画、国際コンペ、実施設計、工事発注着工までわずか6年2ヶ月で成し遂げられました。

京都商工会議所から協力要請を頂いたのは1988年。三輪は国際設計コンペのプロフェッショナルアドバイザー（以下「PA」）に任命されました。PAの身分と権限の根拠はユネスコの国際コンペ規程です。PAの責務は、自由に、フェアに議論ができるよう、よそから邪魔が入らないようにする、管理と保安とのこと。ユネスコの国際コンペ規程は国連総会で議決され、各国へ勧告された国際条約です。三輪は、国際建築家連盟を訪問してユネスコ規程を勉強し、その仕事はPAの職務職責の確認から、UIA・JIAなどの関係機関との協議、要綱の作成や国際的な実績のある審査委員の編成、審査会の運営、進行管理など多岐に渡りました。

日本では同時期に、関西国際空港ターミナルビル、東京国際フォーラムが国際設計コンペで行われました。日本で、その後も国際コンペが行われていますが、国内法の整備や人材育成はまだまだだと思っています。

「大規模プロジェクトに携わることには技術力を高め、少々のことでは動揺しなくなる。スポーツでも芸術・芸能でも同じである。そういった大舞台を用意するのは、誰か？」

事業推進のため、先ずフローチャートを作成し、基本理念と事業手順について関係者の合意を得、次に機能・規模・手法等を検討する委員会の設置をお願い出たそうです。計画を推進するのがプランナーという職能人の職務。駅ビルのプロジェクトには、特定街区、区画整理、都市計画街路、駅前広場の4つの都市計画手法が駆使されています。

まさに時間との競争で取り組まれたプロジェクトの経験は、その後担当する様々なプロジェクトを遂行する上で大きな糧と力になったそうです。京都駅ビルプロジェクトは非常に大きなプロジェクトで、業務計画フローを見ても様々な要素が絡み合っており、技術力はもちろん、マネジメント力や胆力も非常に重要だと感じました。聞いているだけで胃が痛いなあ、と思っていた私はまだまだ未熟だと感じました。（笑）

「研究者とコンサルタント、両者に共通するのは「事実」に立ち「真実」を追求すること」

建設当初、景観論争が起った京都駅ビル。アルパックの創始者西山卯三先生は、駅ビルの高層化に反対されていました。先生とは、関西学研都市構想も駅ビルも、関わるかどうかから話をしていたとのことでした。「計画」の論理と「研究」の論理は一致しない、「計画」とは営業、即ちビジネスのこと、駅ビル開発もJR西日本も、そして、アルパックもビジネスの論理、即ち、収入・支出の原理に従っており研究者とは違う、真理の追究を使命とする研究者も命がけ、事業を推進するコンサ

ルタントも命がけの闘いである、といった話が印象的でした。..竹内

◆ ◆ ◆

現地では京都駅ビル開発（株）の高浦敬之さんに駅ビルのご説明、ご案内をいただきました。以下は、高浦さんのお話しをご紹介します。

「空調システムの更新でエネルギー使用量を熱源で60パーセント削減」

今日ではパリ協定が気候変動対策の国際的な枠組みとして大きな役割を果たしていますが、以前はその役割を地球温暖化防止京都議定書（COP）で採択された京都議定書が果たしていました。京都議定書が開かれた年に駅ビルは、オープンしています。年間約4万8千トン（京都市全体の約0.8パーセント）の二酸化炭素を排出し、建物では1位でした。

駅ビルで使うエネルギーの約半分は空調によるもので、京都駅ビル開発（株）では、1度目の空調の設備更新の際に、エネルギー使用量を熱源で60パーセント、ビル全体でも30パーセント削減しました。単なる老朽化による取り換えではなく、環境問題に対する意識が高まる社会の流れを読み取って大胆な設備更新を行ったそうです。京都駅ビル開発の熱源改修プロジェクトは、省エネ大賞経済産業大臣賞他を受賞しています。

「雨水と地下湧水を利用して京都の原風景を再現」

環境負荷低減への積極的な貢献として、駅ビルの屋上に降った雨と地下湧水を貯水タンクにため、階段状に並べたプランターに流下させる「緑水歩廊」があります。「緑水歩廊」

は京都の原風景を再現しているとのこと。地下湧水のくみ上げには太陽光発電の電力を利用しており、自然の力と再エネのみで水の循環を実現しています。

また、高浦さんの野望（！）には、京都駅前の再開発のチャンスをつ捉えて、琵琶湖疏水を源とする本願寺水道を京都駅の駅前広場まで延伸し、平時は水と緑豊かな京都の玄関、災害時には多くの外国人を含む帰宅困難者受け入れの防災拠点として整備する構想があるようです。

高浦さんは京都駅ビルを100年持たせたいとのこと。今後もより重要になる温暖化対策や防災等の課題に対して、柔軟に対策をしていく京都駅ビルがどのように変わっていくのか、2097年にはどんな姿になっているのか、楽しみです。見ることはできないですが（笑）..伊藤

[arpak と京都駅ビル]

1994年の平安遷都1200年記念事業の一環として計画された京都駅ビル。4代目にあたる現在の駅舎は、国際指名コンペ方式で設計されました。アルパックは、コンペのプロフェッショナルアドバイザー、事務局として、応募者、審査員とのやりとりなどの他、駅前広場の設計を行いました。



第16回適塾路地奥サロンを開催しました

『プレイスメイキング～アクティビティ・ファーストの都市デザイン～』

中塚一

適塾路地奥サロン実行委員長

9月13日に、書籍「プレイスメイキング」の著者である園田聡さん（有限会社ハートビートプラン）をお招きして、第16回適塾路地奥サロンを開催しました。

「プレイスメイキングとは何か」からスタートし、博士論文の時から研究されている理論編としての「プレイスメイキングのレシピ～10のフェーズと10のメソッド」、そして実際に現場での実践編としての「あそべるとよたプロジェクト（愛知県豊田市）」を中心に、理論と実践を交え、話題提供頂きました。

「僕らがつくるのは、Public Life」と、「つかう」発想から「つくり」、「愛着」を生む、これまでとは逆のパラダイムシフトにより、空間（space）ではなく居場所（place）づくりを行うことの重要性を紹介していただきました。後半は10のフェーズと10のメソッドを、実務の現場でどのように活用してきたかを「あそべるとよたプロジェクト」を基に話題提供していただきました。

「与えられる都市から、自ら獲得する都市へ」都市に

コミットする新しいデザインメソッドとしての PLACE MAKING を、私たちを含め沢山の方々が活用し、ワクワクする場が数多く生まれてくることを楽しみにしています。

追伸

適塾路地奥サロンの全ての回の紹介を、レターズでは掲載しきれないので、近々にホームページで掲載するよう企画を進めています。楽しみにお待ち下さい。



アルパック物故者慰霊祭を行いました

馬場正哲

世話人代表

アルパックには“ない組織がない”と言われてきました。労働組合、OB会、昔はユニークな「奥さん会」まで。社長と団体交渉もし、「残業を減らして、亭主を早く帰らせて、朝の挨拶ぐらいの余裕をなど..」これには、経営者夫人も同調したと聞きます。

さてこの苦楽をともにしてきたOB会と、この令和元年7月20日に京都三条寺町の天性寺で、アルパックご縁の物故者法要を行いました。

アルパックは一昨年、創立50周年を祝うことができました。これも叱咤激励し支えていただいた故西山卯三先生、故藤野良幸先生はじめ多くの方々と、結集した多くの所員の弛まぬ努力により為し得たことと感謝する次第です。私たちは、この蓄積を礎としつつ、さらなる発展と社会貢献をめざしてご恩に報いることを誓いました。

創業者三輪泰司の米寿祝い

天性寺からバスで京都市国際交流会館に移動し、三輪泰司名誉会長の“米寿”のお祝い会を開催しました。この7月に入社した近江が司会し、今年度入社の盛川、長谷川、小川の三人が花束とお祝いの品を三輪さんと奥様に手渡しました。アルパック創業の思いとともにこれからに期待したいとの謝辞と激励を頂きました。この行事がアルパックの他者に対する親愛の情や優しさの実践となり文化として発信され継承することになればと思います。

慰霊祭の導師を務めて頂いた浄土宗曼荼羅山天性寺の当麻宣明・友寛様（霜田OBの奥様のご実家）、お祝い会の会場を提供頂いた奈良の川井徳子様との縁にも感謝申し上げます。



天性寺での法要



集結した多くの所員とOB



三輪名誉会長の米寿の祝い贈呈

近況 & イベントのお知らせ

撮っても撮っても絵になる島・・男木島のたび

鮎子田稔理

建築プランニングデザイングループ

建築プランニングデザイングループは、今年4月に名古屋の間瀬が加わり総勢11名の大所帯になりました。今回これを機に、男木島へ交流&研修旅行へ出かけました。瀬戸内海に浮かぶ男木島は近年では瀬戸内国際芸術祭が行われ、開催中には数万人の人が訪れる面積1.34平方キロメートル、100世帯ほどが暮らす小さく穏やかな島です。



男木島のうろこ状に連なる街並み

急勾配の傾斜地に堅牢な石垣を積むことで造られた住宅が島の南西斜面にうろこ状に連なり独特の風景を造りだしています。石畳や石段の美しい坂道が迷路のように島内に巡らされていますが、道幅が狭く自動車の通行は禁止されています。このため島民の暮らしには「オンバ」(乳母車を改造したもの)が不可欠で自分好みにカスタマイズされたオンバを島のあちこちで見ることができます。

港にはスペインの芸術家の作品(待合所)が訪れる人を出迎えてくれます。貝殻をイメージした屋根には8つの言語がデザインされ、建物自体がアートとなっています。その他にも海岸に佇む「歩く方舟」や民家に設置された現代的なアート作品が点在する



島民の必需品 オンバ



港にある貝殻をイメージした待合所

一方で、天正8年(1580年)に建立されたといわれる豊玉姫神社や日本の灯台50選に選ばれている総御影石造の灯台など見どころは満載です。何より瀬戸内海に沈むとろけるような夕陽や人懐こい猫に癒やされ、ゆったりとした島じかんを過ごすことができました。

常日頃何かと時間に追われがちですが、時にはリフレッシュし、意思疎通を図りながら、どこを撮っても絵になるようなグループでありたいと思っています。



細い路地を歩く



海を見下ろしながら歩く



アート作品 歩く方舟



夕陽



公衆トイレの自動水栓で水を飲む猫



猫と塗師木



ブックストリート

植松陽子：
サスティナビリティマネジメントグループ



ホーチミン市のまちなかで出会った本と 憩いの空間

本に出会う場所、本を手にする場所
所は人それぞれでしょう。

ホーチミン市はベトナム最大の都市であり、行政や経済、観光の中心地となっています。市内には、劇場や図書館などフランス統治時代に建てられたコロンIAL調の建物やまち並み、おしゃれなレストランやお店、近代的な高層ビル、歩道脇の露店即席カフェなどが混在しています。

ネオ・ゴシック様式の中央郵便局横にあるグエンバンビン通りでは、2016年にブックストリート「Duong Sach (ドゥオンサク)」

がオープンしています。150メートル弱、幅8メートルの通りは歩行者専用となっており、その両側には10以上の小さな本屋が立ち並んでいます。店頭を覗いてみると、

現地の本だけでなく、日本の漫画や小説の翻訳本まで様々な本が並んでいます。観光客を意識した可愛らしい雑貨も売られています。国民の年間読書量が年間数冊にも満たないベトナムでは、2014年から毎年4月21日を「読書の日」と定め、政府主導で国民の読書奨励のための様々な取り組みが実施されています。このブックストリートもその政策の一環であり、なんとオープン後の半年で2万4千冊以上の書籍が売れたそうです。

本屋横にはおしゃ

れなカフェも併設されています。ベトナムのカフェはオープンスタイルがほとんどで、冷房はないのですが風通しの良いつくりとなっており、緑も多いことから、それほど暑苦しさを感じることはありません。私が訪れたの



キッズスペース



本屋併設のカフェ

は暑い夏の夕方近くでしたが、バイクが往来する周囲の混沌と喧騒を横目に眺めつつ、多くの人が本を読みながらカフェで寛いでいました。

また、カフェの横には、半屋外空間のキッズスペースも設けられています。子どもたちはまちなかの通りと本との緩やかなつながりのある空間で、楽しく安全に遊ぶことができ、親もその様子を見守ることができ、日本でも子どもを連れてまちなかにお出かけするのはハードルが高いのですが、こういった空間があれば、子育て世代がまちなかに出る契機になるのではと感じました。

このブックストリートは、素敵な本との出会いを届けてくれる場として、市民の憩いの場として、観光地として、子どもがまちで過ごす場所として、周囲とは差別化された非常に魅力的な空間でした。

表紙写真：安全な漁船の航行を見届ける白亜の灯台「尻屋崎灯台」(青森県) / 撮影 中村孝子
※「日本の灯台の父」といわれるブランドン設計

「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。



アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F

TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F

TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F

TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所 〒810-0802 (株) よかネット: 福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

ホーチミン 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam (ベトナム)

TEL+84(028)6255-6732



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。